渡辺淳一

化粧

上

朝日新聞社

化粧

上

渡辺淳一

朝日新聞社

化粧　上

一九八二年四月二十日第一刷発行
一九八二年十一月十五日第十一刷発行

著　者　渡辺淳一
装　画　原万千子
装　釘　熊谷博人
発行者　初山有恒
印刷所　凸版印刷株式会社
発行所　朝日新聞社
〒104　東京都中央区築地五―三―二
電話　〇三―五四五―〇一三一（代表）
編集・図書編集室　販売・出版販売部
振替　東京〇―一七三〇

定　価　九八〇円

0093-254075-0042

©J. WATANABE 1982　Printed in Japan

目

次

さくらの章　7
若葉の章　53
初虹の章　89
夏草の章　126
川風の章　161

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

秋草の章　197
落葉の章　242
初春の章　260
李花の章　302

化

粧

上

さくらの章

「ほんまに、なんで桜はこんな一生懸命咲くのやろか」
緋毛氈の床に両手をつき、槇子がつくづく呆れたという声をあげるのに、里子は甘酒を飲みかけた手を止めて、
「一生懸命って、なんえ？」
「そやかて、なにもこんな精一杯、樹い全体、火がついたように咲くこともないやろ」
「あほらし、桜はなにも、一生懸命咲きたくて咲いてるのとは違う。四月になって、桜が花を開くのは、桜という樹に備わった宿命やないの」
「へえ、宿命、可哀相な宿命や」
「可哀相？」
「そうやんか。見ず知らずの人にまで、こんな美しいの、全部さらけ出して、『きれいや、きれいや』いわれても、四、五日で、あとは誰も見向きもせえへん。うちはそんなのはご免や」
「なにも、あんたと桜とは違うやん」
「それはよう知ってます。でも、桜は一生懸命すぎて嫌いやわ、頼子姉ちゃん、どう思う」
槇子が右隣にいた頼子にたずねると、頼子はかすかに笑って、
「咲いてもかまへんけど、花だけやから」
「それが、あかん？」
「葉にくらべて花が多すぎて、少しは葉もないと疲れるし」
「やっぱり、頼子姉ちゃんはうちと同じ感覚や、桜の悪いところは、花だけ咲きすぎて疲れるとこや」
「そんな疲れるところへ連れてきて、おおきにお世話さんどしたなあ」
里子が馬鹿丁寧に頭を下げるのに、
「お姉ちゃん、そんなつもりでいったんやない。あんまりここの桜がきれいやから、ちょっとけなしてみとうなったんや」
三人姉妹の他愛ない会話を、母のつねと、里子の夫の菊雄が苦笑しながらきいている。

五人は今日、亡くなった長女の鈴子の七回忌を済ませたあと、松山閣で昼食をとり、そのあと原谷へ花見に来たのである。

そもそも、この原谷苑へ行こうといい出したのは里子である。

法要のあと、花見というのは少し不謹慎かもしれないが、まだ陽は高かったし、姉妹が三人揃ったのも久し振りだった。法要で、辛気くさくなったあとだけに、花見でぱあっと、気分を変えたいという気持もあった。

里子の意見に、みなは賛成したが、四月の二十日で、京都の街のなかの桜はほとんど終わっていた。

わずかに残っているといえば御室くらいだが、それも有名すぎて遅咲きの花見客であふれているに違いない。

その点、原谷ならばさほど有名ではないし、松山閣から、金閣寺の裏道ぞいに車で五、六分の距離である。

一年前、里子は偶然、夫の菊雄に連れられて原谷へ行き、その美しさに驚嘆した。

やや緩やかな傾斜を持った六千坪の台地に、山桜、しだれ桜、牡丹桜などが密集し、まさに山全体が桜といった感じである。

この山は個人の所有で、持主が趣味で桜を集めたのを、十数年前から一般に開放するようになったらしい。

時間は日中だけで、入園料をとるが、おかげで、桜もまわりの環境も美しく保たれている。

原谷という名のとおり、鷹ケ峰の麓の谷あいにあるだけに、市内より二、三度は気温が低く、それだけ桜も遅い。

「そんなところ、あったんかいなあ」

里子がいいだしたとき、六十年間、京都で生活してきたつねも原谷を知らなかった。

「そりゃ、たいそうきれいきれいなんやから」

結局、菊雄が運転し、身内の五人だけで、そのまま原谷に来たのである。

頼子や槇子が、一生懸命咲きすぎるとか、疲れるといっても、美しすぎる桜に、二人が嫉妬したといえなくもない。

「さあ、そろそろ行かんと」

頼子が時計を見たのは、それから二十分ほどしてからだった。

「もう二時やから、これから新幹線に乗って、東京に着いたら、七時になってしまうわ」

「お姉ちゃん、やっぱり今日、帰らはるの。せっかく来はったのに、もう一日くらい、ゆっくりしはったらええの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に」
「そうはいかへん。なんせ、うちは新興勢力やさかい。あんたのところのように名門とは違います」
「そやかて、うちらかて大変え」
　里子は床の端で、ソーダー水だけ飲んでいる菊雄のほうを見るが、菊雄はきこえなかったように、なにも言わない。
「あんたには、菊雄さんやお母さんがついていやはるさかい、それだけ安心どす」
「そんな、うちかて大変なんえ」
　里子は高台寺近くで、母がやっていた料亭「蔦乃家」を三年前に受け継いだばかりである。明治の末、祖母の代から続いてきただけに、京都でも一流の老舗である。
　菊雄は、これも大阪の料亭「清村」の二男で、蔦乃家に修業に来ていたのを、つねに見初められて、三年前に里子と結婚し、婿入りしたのである。
　料亭のぼんぼんらしく穏やかな男で、はたから見るかぎりでは、里子は恵まれているように見える。
　だが里子にしてみれば、表向きは隠居したふうで、相変わらず店のことに口を出す母と、婿養子の夫と、古くからいる仲居達にはさまれて、それなりに気苦労はある。
『うちは、一日でもお店休むと、もうお客さんから、なんやかんやと文句いわれて、大変なんえ』
　頼子がいうと、里子も負けじと、
「うちとこかて、同じことや」
　姉さんは家を継ぎたければ継げたのに、勝手に出ていったではないか……里子はそういいたいが、そこまでいっては身も蓋もなくなってしまう。
「頼子姉ちゃんは、お店へ出かけるとき、いつも『さあ、戦争や、戦争や』いうて、出かけるんやから」
　東京の大学へ行っていて、頼子の生活を知っている槇子が、告げると、
「いくら戦争か知らんけど、お姉ちゃんは、桜みたいに、ちょっと気張りすぎやわ」
　里子が精一杯の皮肉をこめていうと、頼子は素直にうなずいて、
「ほんまにうちは桜かもしれしまへん。いまにぱあっと散って、毛虫だらけの枯れ木になってしまうかもわからへん」
「そない気持悪いこと、いわんといて」
「さあ、行きまひょ」
「ほんまにお姉ちゃん一人のおかげで、せわしないわ」
　せかせられて、里子も仕方なく、着物の前を叩いて立ち

上がった。

さほど有名ではないとはいえ、遅咲きの名所をききつけてか、原谷にはかなりの花見客が来て、貸し床はほとんど満員のようである。

そのあいだを、菊雄と母に続いて、三人の姉妹が行く。

母のつねは利休鼠の無地に黒の羽織を手に持ち、一番上の頼子は藤色の、二番目の娘の里子は若草色の、三番目の槇子は臙脂の着物を着て、背には銀糸の縫い紋をつけている。

法要の帰りだけに、いずれも無地に黒帯だが、三人並んで歩くとさすがに目立つ。

頼子は細そりした体つきで、顔も小さく引き締まっている。今年二十八で、和服に合わせて頭を巻き上げているが、洋服でも着て髪を落とすと二十四、五にしか見えない。

里子は二つ下の二十六だが、いくらか小柄でぽっちゃりしている。京女らしく色白で、かすかに受け口の口許が愛らしい。

末娘の槇子も色白で、どちらかというと里子のほうに似ている。今年二十一歳で大学の三年生である。

頼子が京都にいたころは、蔦乃家の美人三姉妹ということで、高台寺近くや、料亭筋では、知らぬ者はなかった。

だが、亡くなった鈴子が生きていたころは、四姉妹で、四人が揃って着飾ったところは、まさに壮観としかいいようがなかった。

近所の男達のあいだでは、花見以上の見物だといって評判であった。

とくに鈴子と頼子は双子であっただけに、顔から姿形、仕草までそっくりであった。正月や祇園祭などに、四人が揃って出歩くときには、あとから男達がぞろぞろと続くこともあった。

だが、四人が揃って出歩いたことは数えるほどしかない。

鈴子と頼子は十六の年齢から舞妓に出て、二十でそれぞれ襟替えした。二人とも子供のころから京舞や清元を習っていて、母親にすすめられるままに、抵抗もなく舞妓になったが、いざなってみると、ほとんど自由の時間はなく、一日の大半が稽古とお座敷で追われた。

里子と槇子は、二人の姉のそんな辛さを見ていたから、初めから舞妓になる気はなかった。

もっとも里子だけは、蔦乃家を継ぐというので、二年間だけ舞妓で出たが、それも行儀見習のためだった。

槇子になると、もう初めから、花街に勤める気はなかっ

たし、つねも、強制することはなかった。
ともかく、鈴子が死んだのは二十二になったばかりだったから、槇子はまだ十五で、美しいといっても、子供、子供していた。
それだけに四人姉妹といってもまだ若く、いま三人が並んで歩くほうが、成熟した美しさがあるともいえる。
「いよう、別嬪さん」
酔った花見客が姉妹を見て手を上げる。まわりの男達も、ぽかんと見とれている。
そんな視線のなかを、頼子はまっすぐ前を見て歩いていく。目鼻立ちが整っているだけに、いくらか冷たい印象を与える。里子は商売柄か、いくらか腰をかがめ、ときには愛想笑いさえ浮かべている。こんなところへきても、お得意様に会いはしないかと、つい気配りする癖がでる。
三人のなかで一番緊張しているのは末っ子の槇子で、声をかけられても振り向きもしない。その硬い表情が、かえって初々しく見える。
母のつねは、六十になっているが、長年、京舞で鍛えただけに、背筋がぴんと張り、老いたとはいえ、かつて東山随一といわれた美貌は消えていない。
「葛乃家の姉妹だ」と気づいたのか、小声でささやきあっている花見客もいる。
母と三人姉妹はそのまま桜のトンネルを抜けて原谷苑の出口に出た。車はその向かい側の駐車場にあり、そこから菊雄が移してきた車にのって、四人は一様に溜め息をついた。
「ああ、疲れた」
「ほな、まっすぐ家でよろしおすな」
菊雄がたしかめてハンドルを握る。運転席の横には里子が、うしろの座席に、つねと頼子と槇子が並ぶ。
「お母さん、疲れはった？」
「疲れたけど、きれいな桜を見せてもろうて、今日はほんまに目の保養をしたわ」
娘達に囲まれて、つねは言葉少なに微笑む。
「お姉ちゃん、今度、いつ来はるの？」
前の座席から里子が振り返ってきくのに、頼子は少し考えて、
「そうやね、いつかなあ」
「ゴールデンウイークはお休みやし、来はる気になったら、来られへんことないやろ」
「そやかて、お店をなおすかもわからへんし、カウンターが少し不便やし、絨緞も汚れてきたし……」

「いまのお店に移って、何年にならはるの？」
「三年かな」
「早いもんやね」
頼子が祇園町から、東京の新橋へ鞘替えしたのは、いまから六年前だった。そこで三年間ほどお座敷をつとめてから、銀座の並木通りに店を出した。
十五坪ほどで銀座のクラブとしては小さいほうだが、それぐらいがかえってやりやすいともいえる。
「でも、偉いわ」
「そんなことあらへん。誰でも切羽つまったらやれるのんえ」
「そやかて、うちなんか、とてもとてもでけへん」
里子が感心するのを、母のつねは、きいているのかいないのか、無表情で前を見ている。
すでに車は、蓮華谷を抜けて金閣寺の横へ出たらしい。そこから馬場町を抜けて西大路に出る。槇子は疲れたのか、窓に額を当てて眠っている。量は少なかったが昼酒が効いたのかもしれない。
やがて、車が西大路に出たとき、里子が思い出したようにいう。
「そうや、お姉ちゃん、半月ほど前、熊倉さんがお店に見えはったえ」
一瞬、頼子は美しい眉根を寄せて、
「誰と？」
「取引先とかいうお方と、お二人で、相変わらず大きな声で威勢よう」
「また、入れはったんか」
「そやかて、なんでも食べさせてくれい、いわはったらお客さんやし、追い返すわけにもいかへんし」
「あの人は、鈴ちゃんの……」
「そら知ってます。けど、それはもう古いことやし、お店とは関係ないことどっしゃろ」
そのまま頼子も里子もなにもいわず、車のエンジンの音だけが単調に響く。やがて沈黙に堪えかねたように里子が、
「けど、あの人、鈴姉ちゃんとのこと、悔いてはるのと違いまっしゃろか」
「いくら悔いても、許せることと許せへんこととあります」
「そらそやけど」
「うちは許さへん」
頼子は吐きすてるようにいうと、不快な思いをおし込むように、ぐりぐりと帯のなかに指をさし込んだ。

鳶乃家は東山山麓の高台寺へ向かう坂の中ほどを右へ、石垣ぞいの道を百メートルほど入ったところにある。
入口は萱ぶきの山門で、そこから本館までの道は苔むした石畳になっており、左右の茂みに、路地行灯が道しるべのように置かれている。
いまはまだ日が暮れるには間があり、門の手前の車寄せのあたりで、番頭が一人、ホースを片手に水を打っている。
女達を乗せた車は、その車寄せの端に、かすかに砂利をきしませる音をたてて停まった。
「へえ、お帰りやす」
番頭が駆けつけてくるのに、つねは素早く、座席から顔を出して、
「なにか、変わったことあらへんかったか？」
「別に、仲居さんのほうからは、なにもいうてはらしまへんが」
つねがうなずくあいだに、女達は車から降りて軽く背伸びする。
「ああ、なんや、ぐったりしてしもうたわ」
「なにいうてるんの。走ってるあいだ、こっくりこっくり寝てはったのに」
「そやかて、昼酒はようまわるもん」
女達は話しながら、車寄せの先の裏木戸からなかへ入る。
鳶乃家は古い木造の二階建てで、部屋数は大小とりまぜて十六ほどある。このなかで最も見晴らしのよいのは、西側にある「落陽の間」である。ここからは山裾の斜面を利用した庭を通して、八坂の塔が見える。夕暮れどき、その五重の塔が西陽を受けて金色に輝くので、先々代が、「落陽の間」と名を付けたのである。
この部屋から、舞妓が欄干に手をつき、うしろ向きにだらりの帯を見せながら、八坂の塔を見ている姿は、高名な画家により、絵にも描かれたことがある。
その夕暮れの景色もさることながら、陽が落ちたあとの夜景もまた美しい。松や楠の老樹の木の間越しに京の街の灯が点滅する。
庭は、先々代のときに完成したといわれているが、広さは五千坪、春は躑躅（つつじ）、秋は紅葉が彩りをそえ、いまは白木蓮が鮮やかである。花に目を惹かれて忘れがちだが、この庭の石は鞍馬、貴船、那智などから取り寄せたもので、裏庭の茶室へ向かう道のつくばいの横には、三畳ほどある黒石が配されている。
庭から家まで、すべて古い割烹（かっぽう）らしい落ち着きと趣を備

えている。
しかし家族の住む家は表の古さに似合わず、鉄筋の洋館である。もっとも、本館のうしろの一段低くなった茂みのなかに建てられているので、客の目にはほとんど触れない。
割烹や料亭の経営者は、普段古風な木造の家で働いているせいか、住居は意外にモダンなつくりにしているところが多いが、蔦乃家もその例に洩れない。
この洋館は十年前、まだ里子達の父が生きているときに建てられたものである。建坪は二十坪ほどで、さほど大きくないが三階建てで、部屋数は八つある。一階は茶の間と母のつねの居間と仏間があり、里子達は二階をつかい、三階は来客や仲居達が泊まるためにとってある。
洋館とはいえ、つねはソファの上でも坐るような人なので、一階はすべて畳になっているが、三階にも一つ和室がある。頼子はそこで、着替えをしてから、二階の里子の部屋に降りた。
「ほな、里ちゃん、帰るわ」
「お姉ちゃん、もう?」
「そやかて、これから行っても、四時半の新幹線にぎりぎりになってしまうもん」
「その帽子、ええなあ」
頼子は紺のダブルのジョーゼットのジャケットに合わせた、紺のつば広の帽子をかぶり、同じ紺のスーツケースを持っている。
「うちも、帽子をかぶってみたいけど、似合わへんやろなあ」
「そんなことおへん、里ちゃんなら、もっとつばの小さい、キャスケットみたいのが、ええかもしれへんなあ」
「けど、帽子は、お姉ちゃんのような、すらっとした人やないと。うちはこのごろ、少し中年太りかもしれへん」
「そんな、うちより若いのに」
「そやけど、こんなお商売してると、心も軀も、どんどん古くそうなっていくような気いして……」
商売柄、ほとんど和服を着ている里子は、ドレッシーな洋服を着こなす頼子が羨ましい。
「ほな、行くさかい、菊雄さんは?」
「本館のほうへ行かはったから、ええわ。それよりお母さんに……お母さん、本当はお姉ちゃんに、まだまだいて欲しいのと思うわ」
「そんなことおへん、さっきも、早う帰ったほうがええ、いうてはったし」
「そんなの嘘にきまってるやないの。いて欲しいのに強い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com